「皆様からの絵本の疑問に対する私の考え」

福音館書店　絵本研究室　勝尾　栄

★絵本とはどのようなものか

1)そもそも絵本とは何か

一言で言えば、文字が読めない人のための本が絵本です。ラスコーの壁画のように古くから絵は文字よりも物語を伝えやすい方法として利用されてきました。絵本という形の特徴としては、一枚一枚とページをめくることで場面が変わり、時間と話が展開していけることがあげられます。絵が物語るという点では、中世以降のキリスト教の教会壁画や絵画、仏教における仏画なども同じです。これらは文字を知らない人たちへ、宗教の教えや宗教者のエピソード(物語り)を伝えるためのものとして利用されました。子どもたちは文字を知らないですから、絵で物語る絵本が幼児向けのように思われがちですが、歴史的に見れば文字を知らない大人に向けた絵本もあり、子ども向けという考えは最近のものといえます。絵本は構造上、角があり紙が薄くて、扱い方によっては怪我をする可能性があります。そこで、子どもが絵本を一人で持ち歩くようになるころまでには、扱いをちゃんと教えてほしいです。園にある絵本で、角がとがっている絵本は、机などに押し付けて角を丸くすることをお勧めします。

2)物語絵本と科学絵本の違い

物語絵本は、主人公の住む世界で主人公と友達がいろんなこと(遊びや冒険など)をします。子どもは、現実世界から物語世界へと入って行き、主人公たちと一緒に行動し時にはスリルを味わいます。物語絵本の主人公たちは、どんな異世界へ行っても最後はもとの場所に戻ってこられるようになっています。子どもにしてみれば、いつも主人公と一緒に戻ってこられる安心があるので、危険な冒険にも挑戦できるし、楽しめます。現実では、一人で行動することが許されない状況でも、物語の中ではどこへでも行って思い切り体験(疑似体験ですが)してこられるのが物語り絵本のよさです。物語を通じて、さまざまな登場者の気持ちがわかるようになり、共感する力をはぐくむことも出来ると考えます。

科学絵本は、現実世界の一部をクローズアップして、その不思議や面白さを子どもの視点で伝えます。子どもは、読んだ後で実際に経験したときのような満足感を覚えたり、実際に外に出て自分でも体験(確かめてみたいという好奇心と実際に触れたときの感触を味わう)して経験を増やしていきます。外で経験した後で科学絵本をもう一度読んでもらった子どもは、今度は自分の実体験と重ね合わせて絵を見るのでその満足感は何倍にもなります。時には、子どもたちが興奮気味に自分の経験を言い出して、読みきかせどころではなくなることもあります。そんなときは読み聞かせを中断してください。読み聞かせよりも子どもたちが体験したことを、みんなで共有することのほうが、子どもの心が育ちます。ぜひ、さまざまな話題で盛り上がって、楽しんでほしいと思います。

物語絵本は子どもたちを現実とは異なる世界を想像していく力を育み、逆に科学絵本は現実の世界へと目を向けさせ、実際の行動へといざないます。科学絵本をきっかけに実体験を積んだ子どもは、「こうしたら、どうなんだろう」と新たな仮説を立てて真実に迫ろうとするでしょう。『哲学する赤ちゃん』(亜紀書房刊)という本を書いたアリソン・ゴプニック氏は、アメリカの子どもの学習と発達に関する研究者です。彼女は「想像力は真実を見つけるのを助け、真実を知ることは想像力をはぐくみます」と語っています。物語絵本と科学絵本は、この想像力と真実に働きかけるものなので、ぜひ両方あわせて読んでいただきたいと思います。

3)なぜ絵本の読み聞かせが大切か？

第一番の理由は、「子どもは文字を読めない」から、大人が子どもに代わって文字を読むからです。しかし、子どもにとって（特に乳児にとって）、言葉を聴いたからといって物語を理解することは出来ません。意味がわからなくても子どもは大人の語りを聞きながら「絵を読んで」いるのです。乳児期の子どもにとって、大人の声やぬくもりを感じ取り、音や色の変化を楽しんでいるだけかもしれません。しかし、それでもかまわないのです。なぜなら子どもは、こうした大人の読み聞かせによって、大人への信頼を覚えたり、愛情を育むことが出来るからです。もちろん絵と言葉をつなぎ合わせて、ものの名前や世界の秩序も学んでいます。想像力が育ってくれば、物語ってもらうことで、頭の中では主人公たちが実際に動き出し、自分も主人公と一緒に行動しているよう気がするのです。さきほど「子どもは絵を読む」と言いましたが、絵には、物語だけでなく主人公のさまざまな感情や風景など、物語の世界の全てが描かれています。ですから、子どもは絵の隅々まで見ています。子どもが文字を拾い読みできるようになると、つい「自分で読んで」といってしまう親御さんがいますが、そうすると文字ばかり目が言ってしまい絵を観ることが出来なくなります。子どもにとっては、たとえ物語の内容を覚え、その言葉をそらで言えるようになっても、文字が読めるとしても、大人が言葉にして語ってもらいながら絵を観ることが楽しいのです。読んだ人の言葉のぬくもりに包まれているのは、大人でも気持ちのよいものです。

読み聞かせがよい理由の2つ目として、子どものスピードにあわせて読むことが出来ることです。子どもが絵をじっくり読み込んで楽しんでいるうちは、ページをめくらずにゆっくり待ち、子どもの気持ちが次へと動いたときにページをめくるといったことが出来るのは、読み聞かせならではです。これは録音テープには出来ないことですね。このように、大人による読み聞かせは、子どもが絵本を楽しむためには、欠かすことの出来ないことです。と同時に、読み聞かせする大人自身にもよい効果があるという研究がなされています。睡眠に関してたくさんの著書を出している学者の神山（コウヤマ）潤氏によると、読み聞かせをしているときは、“前頭前野”が活発に活動するそうです。この“前頭前野”は、人の知恵の源と呼ばれ、イライラ感や衝動性を抑える働きを持つ分野ですので、読み手にとっても心地のよいものであるというのが3番目の理由です。

4)発達に応じた絵本の選び方とは（園の集団での絵本選びとは）？

絵本を探すのは、実はとても簡単です。なぜなら子どもは、自分の生活体験と密接に関係した絵本にとても興味を示すからです。ですから、子ども（あるいは子どもたち）の生活体験にあわせ、子ども（たち）の一番興味を持っているもの（団子虫、どうだんご、お泊りキャンプなど）が物語りや主人公になっている絵本を探して読んでみてください。

もう少し年齢を区切って言うならば、乳児期は、ものを観察し認識して吸収するがものすごくあります。しかし、短期記憶（短期に覚えていられる記憶）は短時間ですから、長い話や場面展開にはついていけません。短い展開（2場面で構成されている“いないいないばあ”のような）の絵本や日常生活の一部を再現（“おにぎり”のような）したような絵本を楽しみます。また、言葉を理解していない分、かえってリズムや擬音（オノマトペ）を素直に楽しめますので、大人からみれば意味がわからないように感じるものでも、赤ちゃんなら絵と言葉の響きあいを楽しむことが出来ます。

幼児期になり生活体験も増え、友達と遊んだり役割分担が出来るころには、想像力もかなりついてきます。「ごっこ遊び」が楽しめる子どもは、現実と空想の世界が区別して遊んでいるわけですから、物語絵本も十分楽しめます。また、子どもの願い（「自分も大人と同じことを、一人でやりたい」）と思う気持ちに沿った絵本は、現実ではやらせてもらえない子どもの気持ちを開放するものとして人気がありま

す。

★絵本を読む際に気をつけることは

1)読み読み聞かせ方

読み手に演技力は必要ありませんが、読み手の基本として、あらかじめ読んで物語の内容を理解しておくことは大切です。絵本の展開がわからないまま読むと、会話の区別がつかなくなって、登場している誰が誰に向かって話しているかが、子どもにわからなくなってしまいます。そして、ゆっくりでかまわないので丁寧に間違えずに読むことも大切です。この滑らかに読むというのは、意外と大切です。途中でつっかえた途端、子どもは物語の世界から現実に引き戻されて集中できなくなってしまうからです。

2)絵本はおもちゃか

年齢によっては、おもちゃのような使われ方もします(赤ちゃんは噛み付いて絵本を味わうこともおおいです)。しかし、絵本の中の世界を楽しんだ子どもたちは、絵本をおもちゃのようなもの扱いせずに、絵本として扱えるようになります。また、絵本の扱いを通じて、公共のマナーを学ぶ機会も出来ます。園の絵本は、みんなが読むものだから大事にする、自分の名前を書いてもらった家の絵本は自分の所有物として大切にするということです。こうして公共と個人の違いを学び、扱いを学ぶきっかけにするためにも(最初に申し上げたような怪我を避けるためにも)、おもちゃのままにせず「本は大切に扱おうね」と伝えていただきたいと思います。

3)子どもの反応と対処(どこかへいっちゃう、次々取り替える)

子どもの集中力と物語の長さが合っていない場合は、子どもが飽きてどっかへ行ってしまうことがあります。しかし子どもが、読んでもらっている最中に別のことを始めてしまうのは、興味がないとばかりは言えないようです。自動車の物語を聞きながら、頭の中で物語を空想し、自動車に見立てた積み木を動かしていることもあります。次々と取り替える場合も、自分が聞きたい言葉や絵が載っている絵本がどれだか忘れちゃって探しているのかもしれません(こんな場合、大人のように「こういう話を探しているんですが、どれでしょう?」などと聞く子はいません)。もちろん、なんとなくいろんな絵本を引き出すことが遊びとなっている場合もあるでしょう。その差を見極めるのは普段そばにいる大人しかいません。遊び出している場合は、読んでいる絵本が子どもの発達年齢や生活体験に沿っているかどうかの見直しや、子どもの性格などを考慮して判断していただきたいと思います。しかし子どもが絵本の世界を理解し物語を楽しむようになるには、大人のように1回聞いてわかるわけではありません。もちろん1回読んで子どもの心を掴む絵本もあるでしょうが、「これは子どもたちに読みたい」と思った絵本は、1回の反応で判断せず数回は読んで様子を見ていただきたいと思います。

4)読み続けるときと中断するときの目安

3番の続きになりますが、ほかの場所で、語っている大人の声を聴いている場合があります。そのときは読むのをちょっとやめて子どもの様子を見てください。子どもが「はっ」として振り返るようなら読み続けてください。大好きな大人の声を聞きながら好きなことをやるのは、贅沢なことであり、絵本の読み聞かせとは違ったものになってしまいますが、子どもの中では、きっと絵の場面を思い返しながら聞いているに違いありません。あるいは自分のために傍に大人儀手読んでいることだけを楽しんでいるかもしれません。こうしたことも読み聞かせのひとつとして考える余裕があれば、最後まで読んでやってください。

5)異年齢で読む場合

下の子どもに合わせて読んでかまわないと思います。なぜなら下の子は生活体験や子と名簿量が少ないので、絵本を読んでもらってもついていけないからです。逆に年上の子は小さな子の話はわかります。ベテラン保育者からは、下の年齢の絵本を読むことについて年上の子が文句を言うことはないと聞いています(むしろ、”自分にもこんな時代があったなあ。などと余裕を見せたり、自分が読んでやりたいと言い出す姿があるそうです)。もし上の子がつまらなそうだったら、午睡の時間に、年上の子どもだけ集めて読むという園もありますし、上の子がお散歩に行ったら、下の子だけに読むといった工夫は出来るのではないかと思います。

6)文字のない絵本

文字がないのだから読み方に正解はありません。読み手が、絵を見てわかることを言葉にすればよいと思います。子どもも絵を見て気がついたことを話してもよいと思います。

7)意味を持たない音だけの絵本の言葉をどう読むか

絵を見た印象で自由に読んでください。曲をつけてもリズムをつけてもかまわないでしょう。詩人の谷川俊太郎さんは「心の中に浮かんだ音を自由に出して読んでほしい」とおっしゃっていました。

8)感想を聞いてよいのか

読み終えた後の余韻を楽しんでいる子どもに、感想を聞くのは、物語の世界から現実世界へと引き戻すようなものなので、聞かないでいただきたいです。大人でも「この感動は筆舌に尽くせない」などという言葉がありますが、言葉を知っていても感想を述べるのは難しいことがあります。

本人ですら言葉に出来ない感動をしている子もいるでしょうし、自分の気持ちを言葉で表現できない子どももいます。もし子どもの反応を知りたいときは、読み終えた後、子どもを観察することです。子どもが「また読んで」と絵本を持ってきたり、こっそりどこかで絵本を引っ張り出して観ているとか、絵本の中の言葉を使うようになったといった子どもの様子で判断していただきたいです。

9)子どもの疑問にいつ答えるのか

物語の最中に答えてしまうと、ほかの子の迷惑になります。なぜなら、ほかの子が物語の世界から現実世界に連れ戻されてしまうからです。また、途中で質問してよいとなれば、やがてほかの子も質問をしてくるようになって、せっかくの読み聞かせの時間なのに、子どもは物語に集中できなくなります。これを防ぐために、いくつかの方法をベテラン保育者から教えてもらったのでご紹介します。**A)最初に約束する。**「物語絵本を読むから最後まで聞いていてね。途中でお話しをしたら合図するから、お口を結んでね」と約束をする。**B)その子を見てにっこり微笑む。**子どもが先生の注意を引きたいために質問する場合なら、読み聞かせを続けながら一瞬その子の顔を見てにっこり笑い、気持ちを受け止めたことを知らせる。子どもの質問には、絵本を読み終えた後でも答えない保育者が多い「さあ、どうなんだろう？〇〇ちゃんはどう思う？」とはぐらかすと、子ども同士で答えを考えたり話し合ったりしながら、想像を膨らませていく場合があるからです。

10)同じ絵本を繰り返し読む意味

それは、その子の気持ちにぴったりだから。大人も好きな音楽を何度も聴くし、カラオケで歌うのと同じと思っていただきたいです。大人も子どもも、好きなものは繰り返し楽しみたいものと思えば、子どもだけの

特徴ではないし、大人がいないと絵本を楽しめないので、本人が満足するまで読む覚悟はしてほしいです。ただし、長時間読んだらいいと言うつもりはありません。保育時間の許す限りという意味で、出来ないときは「次のことをするから、今日はこれまでね」と切り上げてかまいません。それを恨む子はいないです。

★よい絵本について

1)主人公

いつも元気で勇敢で、ちょっとやそっとではびっくりしないし、お化けだってへっちゃら。臆病で引っ込み思案だが、観察力や考える力がある。泣き虫。いじわるなどなど……つまり物語の主人公は、子どもそのものなのです。そして絵本ならではの特典として絵本の主人公は、絶対死んだりはしないし、動物やお化けと出会うことができたり、異種間でお話しができる。子どもにとってなってみたい憧れの存在でもあります。そうした主人公が、子どもの気持ちに沿い、心をつかみます。

2)物語の内容

乳児期は、現実の生活を切り取っただけのようなお話。言葉のリズムや色の面白さを楽しめるもの。そして具体的なものの姿をしっかりと伝えるものです。

幼児期は、さまざまな主人公がさまざまな物語の世界と一緒に行動して、怖さや勇気や友情を味わう。仲間と助け合うすばらしさを感じることが必要です。

童話は、子どもが頭に描けるような簡潔で具体的な言葉を使い、子どもの憧れの気持ちを引き出す物語が、子どもの心をつかみます。

3)残酷さについて・昔話について

物語の内容を現実の世界に引き出して「残酷」と思うのは大人です。子どもは、大人が感じるような「残酷」という感情を、まだ持ち合わせていません。「怖い」といった感情は生存本能に近いものであるため生まれながらにありますが、「残酷」という感情は、とても高度な感情です。ですから小さいときは、虫などを殺しても、増分が残酷なことをしている」とは思いません。しかし生活体験や知識が増えるにつれて感情も豊かに育っていくと、「残酷」を理解できるようになります。子どもにとっては、3本足になった馬が走っていても、その姿をリアルに想像するのではなく、絵に描かれた世界を自然に受け止めて面白がれるのです。これは物語りでも同じことで、実体験の伴わない話については、わからないまま楽しんでいます。逆に地獄絵のように絵に描かれた具体的なシーンを見れば、2歳ぐらいの子でも気味の悪いものとして「残酷な姿」を理解し、恐怖すら覚えることでしょう。繰り返しますが、子どもは絵に描かれた世界を楽しんでいます。早いうちから「残酷なシーン」に触れさせることはないと思います。では「残酷さを省いたかわいい絵本がよいか」といえば、これも違います。絵本に描かれる世界は、人間や自然界の本質に触れているものも多くあります。大人から見れば「残酷」と感じるものでも、それが現実や自然界の真実を描いているものであれば、選んでほしいと思います。

その理由は次のとおりです。昔話の「残酷」には、物語が生まれた地域では当たり前の状況もあります。「3匹のこぶた」の物語が生まれたイギリスでは、狼が家畜の豚を食べてしまうのは日常にある光景ですし、豚は雑食動物ですから狼も食べます。イギリスでは当たり前の状況を、農耕民族で狼の恐怖におびえることのない日本人が「残酷」として内容を変えてしまうのは、大人の思い上がりではないでしょうか。絵には残酷なシーンは描かれていません。しかし絵を観れば、兄さん豚たちも狼も食べられたことは分か

るようになっています。「残酷」だけを問題とせず、むしろ「願いが何でも叶うだけの物語」ばかり与えることや、「何度でも生き返る」ゲームばかりすることのほうにも目を向けてほしいと思います。

4)キャラクター絵本

絵本に描かれた物語の主人公が、物語の世界から切り離されて商品化され、グッズとして売られるのがキャラクター商品です。絵本を知っている子どもにとっては、主人公が傍にいてくれるのはなんともうれしいでしょうし「ごっこ遊び」が出来てよいとも思います。しかし一旦キャラクター化されてしまうと、絵本の世界や物語を知らない人でも買えるようになります。またキャラクター販売のために、作者は続編を求められることもあります。それは商売的には売り上げに貢献するでしょう。しかし主人公だけが目立った絵本は、内容が吟味されていなかったり、このテーマは扱っていないからと子ども目線ではなく大人の都合で出版されることもあります。子どもの気持ちに沿わず、大人目線で内容が薄い絵本は、すぐ飽きられてしまいます。絵本の主人公を大切にしている著者の中には、主人公たちは物語の中で生きているものだから、単独で取り出してはならないという考え方のもと、キャラクター化に反対している人もいます。「ぐりとぐら」をキャラクターしないのは、著者の中川李枝子さんと山脇百合子さんが絵本の住人である主人公たちを絵本から切り離すことを許さないからです。

5)しつけ絵本・.

大人が子どもに、あるもの(トイレ、はみがきなど)を教えるための絵本と考えています。時として教育がらみで、数字や英語を教える絵本もありますが、これも“しつけ絵本”のジャンルと考えています。たとえばトイレを覚えさせるときは、母親が毎日必死に絵本を読んで「うんちさん、ばいばい」と言ってくれます。しかし子どもがひとりで出来るようになると、ガラッと変わって「うんちさん。ばいばい」とも言わず、「もうトイレができるようになったんだから」と絵本を読まなくなる。子どもも「読んで」とは言わない。実は、こうした光景を皇居のトイレで見かけたことがあります。トイレの向こうで、幼い子が「うんちさん、ばいばい」といったら、母親の冷たい声がしました。「もう、大きいんだから、そんなこと言わなくていいのよ」。トイレから出てきた子は2歳ぐらいのお子さんでした。私はとてもさびしかったです。「気持ちを否定された子どもがかわいそう、用済みになった絵本がかわいそう」と思いました。こうした絵本を、私は「おしつけ絵本」と言っています。もちろん、「しつけ絵本」と思われるものでも、子どもが気に入って何度も読んでもらいたがる

絵本は、その子どもにとって共感できるものがあり、大人の作為を越えた何かがあるので大切な一冊です。ですからジャンル分けして否定することなく、子どもの気持ちを受け止めて何度でも読んでやってほしいと思います。

「園で月間絵本を読み聞かせるとき――全国の園を取材した実例をもとに」

- **保育者が子どもとの信頼関係を作るきっかけに。**

4月、全国各地の園で入園したばかりの子どもたちに対し保育者が、さまざまな方法で「園が楽しいものだ」と伝えていらっしゃいます。「園の中に家庭で親しみ慣れているものがあると、親から離されて不安でいっぱいの子どもたちは、それをよりどころにして徐々に園に慣れていくんですよ」とベテラン保育者から聞きました。皆様もきっとそうなさっていらっしゃると思います。この「よりどころとなる小道具」は、親御さんと一緒に公園で遊んだ砂場や滑り台、家にあるおもちゃがあります。そして、絵本もその一つとして使われています。

京都の保育園の話をご紹介します。その園の3歳児クラスに暴れん坊の男の子たちがいて、2歳児のクラスかクラス運営が難しかったそうです。そのクラスの新しい担任になった保育歴15年の男性保育士は、1ヶ月間毎朝『ねこガム』を読み聞かせたそうです。例の男の子たちが大好きだったからです。読み始める前に子どもたちを集めて座らせ、裏表紙のガムを子どもに一つずつ放り込むようにして「よく噛みながら聞くんだぞ」と言って読んだそうです。すると、子どもたちは「くちゃくちゃ」させながら絵本に見入ったそうです。まず「絵本」を読んでから、次のことをするという生活の流れを作ることが出来たとのことでした。

このように絵本の読み聞かせによって、子どもたちの気持ちを落ち着かせ、やがて先生と一緒に楽しいお話の世界に入ることの楽しさわかってくると、子どもたちも先生が絵本を読む時間を待ち遠しく感じるようになります。こうなれば保育者と子どもの距離が短くなって、子どもの心をつかむことができます。ですから、新しく持ったクラスの担任をする保育者、あるいは新人保育者にとっては、新入園や進級の時期に絵本の読み聞かせをすると、子どもたちからの信頼を得やすいというご意見をいただくこともあります。また、子どもたちの気に入る絵本があると、クラスをまとめやすいとも聞きます。

- **途中入園の子どもが仲間に入るきっかけに。**

途中入園する子は、すでに出来上がっている子どもたちのグループに入りにくいものですが、同じ絵本を読んでいるという共通体験があると早くなじめていけるという話を福島の保育園で聞きました。ある園で途中入園する子に、その当時読んでいた『つぶむこ』を渡したそうです。

「みんなが読んでいるなら…」と親が読み聞かせしたのですが、子どもは「きたない絵。いやだあ、こわい」といって泣いたそうです。しかし入園してみると、毎日先生が『つぶむこ』をみんなの前で読み聞かせをしている。みんなはゲラゲラ笑っている。これを見ているうちに、その子も『つぶむご』が好きになって、とうとう作家まで好きになってしまったそうです。

ところでこの絵本のなかには「おらが帰ってくるまで待っててけろ」とか「つかれたら、やすんでたもれ」というセリフがあるのですが、遊んでいる最中にトイレに行きたくなった子が「おらが帰ってくるまで待っててけろ」といったり、お母さんが食事の支度で忙しそうにしていたら後ろから「つかれたら、やすんでたもれ」と行ったお子さんもいると聞きました。こうして暮らすだけでなく家庭でも言葉がはやってみんなで楽しんだと聞きました。

- **子どもを通じて保護者と保育者との共通の話題ができる。**

『おじいちゃんのトラのいるもりへ』(「こどものとも」2008年9月号)

昨年の震災で園舎が壊れ、公民館で幼稚園を再開した福島の園の話です。園庭もなく放射能の不安もあって外に出られない日が続き、園ではクラスで絵本の読み聞かせを毎日することにしました。震災の影響も気になるので、子どもの様子は(絵本を読んだときのつぶやきも含め)も、親御さんに伝え

ていました。実は『おじいちゃんのトラのいるもりへ』は職員の間で読まないほうがよいのではという意見もあったそうです。それは、おじいさんが死んでトラになるという内容の民話だからでした。震災で避難した人の中には、親戚を震災で亡くされた方もいるので、絵本を読むことが子どもの心を傷つけるのではないかという配慮からです。しかし実際に読んでみたところ、子どもたちは目を輝かせてお話に引き込まれ、ご家庭でもお子さんの反応がよかったそうです。

こうした状況が親御さんから担任に伝えられ、絵本が仲立ちとなって保育者と保護者の信頼関係が作られていき、何かがあると話せる関係が生まれたそうです。

共通の話題という点では、絵本の言葉はよくクラスの中ではやります。『ボッダとボッティ』(「こどものとも」2008年6月号)という絵本では、ご主人のことを「おまえさん」というのですが、これがはやった園もあります。「おまえさん」もふくめ、先ほどご紹介した「おらがかえってくるまでまっててけろ」という言葉、現代では誰も使わないといって間違いない言葉でしょう。しかし子どもは、園でたくさん読み聞かせをしてもらい、クラスのみんなで遊んだり楽しんだ言葉は、家に帰っても使います。月刊絵本を、しばらく読み聞かせした後で家に持ち帰らせる園では、家庭でお子さんが急に「おら」と言ったりするので、「なんのことかしら」と親御さんが不思議に思っていると、持ち帰った絵本の中にその言葉があって「ああ、これだったのね」と理解する……。このようなこともあります。

これは親御さんから聞いた話です。『おはなみに』を見た子ども、『おべんとう』のこども。園と家でそれぞれ絵本を読み聞かせたことによって保育者と保護者の距離を縮める話題が生まれます。

- **園での絵本の読み聞かせから運動会の種目になった**

園の運動会では、一番小さいクラスのお子さんたちのお披露目をかねて、一人ずつ登場する演目があります。東京のある私立園の運動会では、年少さんで『ありのあちち』をテーマにしたそうです。それは普段の読み聞かせすると、子どもたちが、やかんの絵を触って「あちち」と言って逃げる遊びをするようになり、家でもやかんを見ると「あちち」と言っていると親御さんから話を聞いたからです。ためしに保育者が、大きなやかんの絵を描いて壁に貼ると、子どもたちはやかんの絵を触って「あちち」と言いながら走って逃げる遊びを始めました。これを見て、担任が、絵本に出てくるバナナを滑り台、大きな“おせんべ”や“やかん”を絵に描いて子どもたちがタッチして逃げるという、話に沿った遊びを利用して競技にしたところ、大好評だったそうです。ついでに、熱いということを「あちち」という言葉で理解した子が多く、やけどを注意するときにも便利だったとか。

- **園と家庭で読み聞かせた絵本から劇へ、みんなで楽しむ発表会**

話は変わりますが、秋冬の行事で子どもたちが劇をすることがあります。このときに、子どもたちのよく知っている物語(『おおきなかぶ』など)を使う場合があります。子どもたちの劇は、保育の中では子どもの表現活動として位置づけられるものですが、先生の中には、劇の時間が長引かないようにといった配慮をしてしまい、物語から子どもたちの表現を引き出すことよりも、先生のほうで台本を決め、小道具を作って子どもに指導し発表するところがあります。

しかし、やはり子どもたちが、自分たちでセリフを考え、動きや場面展開を考え、配役を考えていき、子ども自身で作り出した表現にしていくほうが保育目標に近いわけですし、それを手助けするには子どもたちが物語の展開や映像を共有できることが必要です。つまり絵本を使って劇を展開することが一番子どもたちのイメージを膨らませやすいのではないでしょうか。

子どもたちの演技に時間がかかるのは、演じる子どもたちの心の中で物語が繰り広げられ、それに浸りきっている証拠だと思います。物語を共有しながら表現する姿は、子どもの成長の証といえるのではな

いでしょうか？

絵本を使って劇を展開した一例を紹介します。福島の季節保育園の話です。その園では、1年間に読み聞かせしてもらった絵本の中で、子どもたちが一番楽しんだものを選んで劇をするそうです。2006年の秋の発表会では『わたしのかさは、そらいろ』（こどものとも2006年5月号）が選ばれていました。子どもたちは主役から端役まで全て演じられます。何しろ毎日読んでもらっていましたし、すべての場面もすべての言葉も子どもたちの中に入っているので、みんなで入れ替わり立ち代り演じながら、徐々に誰が一番役にふさわしいかを決めていったそうです。先生によれば「園と家庭で共通の絵本を読み聞かせをすると、とてもよい副産物がある」とのことです。それは、子どもも親もその絵本を熟知しているので、発表会のときに多少時間が長引いていても、場面展開がもたついていても見る側が気にならないのです。たとえば後ろのほうでぱたぱたと手を動かしている子がいたら、「あの場面の小鳥を演じているんだ」と見ている側も理解できる。「だから発表が、和やかで楽しくなる」そうです。

☆絵本で疑似体験できるからこそ

- **子どもの心を解放する**

「べたべたべた」（こどものとも0．1．2．2004年10月号）

「はじめてのおっかい」の作者・筒井頼子さんの話

筒井さんは、昨年の3月11日の東日本大震災を仙台で被災しました。避難所での生活や食料の確保節電や節水などの生活をしていました。2004年当時は、配本された絵本を何気なく見ていた小学2年生のお孫さんが、震災以後にこの本のあるページを見て「これって無駄遣いだよね」といったそうです。その言葉を聴いたお母さん（つまり筒井頼子さんの娘さん）が、「絵本の中では、思いっきり遊んでいいのよ」と言いました。それを聞いた子どもは、うれしそうに絵本の中で遊んだということです。

このエピソードを紹介してくれた筒井さんは「2004年当時は、何気ない目常生活を描いたものだと、印象に残らなかった絵本だったけれど、こうした震災を受けて生活が一変したときに、この絵本の大切さに気がついた。絵本は、たくさんの種類のものが身の回りにあるほうが、そのときの子どもの心にぴったりのものが見つかって、子どもの心を開放してくれるのだと思う」と話してくれました。

どの絵本が、クラスの子どもたちの心に響くかは、先生が何度か読み聞かせをしてみなければわかりません。また、好きな絵本は一人ひとり違いますから、みんなで楽しむ絵本と個人の絵本が違うこどもあります。しかし、できるだけ沢山の絵と言葉に触れた子ども（たとえば筒井頼子さんのお孫さんのように）は、絵本を楽しむことは一般的には「言葉を学び、その表現や知識を増やす」といった学習面が表に出されることが多くありますが、さまざまな疑似体験を通じて、心の中の見えない部分を育てていくものです。しかも、集団で読んでもらう絵本は、みんなでイメージを共有し言葉を共有して行き、そこから遊びへと発展させることが出来ます。雨の日で外に出られなくても「お散歩している絵本を読んでピクニック遊びをする」といったように、現実ではかなわないことも、絵本では出来ます。「雨で外に出られない」という現実を柔軟に受け止め「みんなでピクニックごっこをする」といった想像力使った遊びに展開できるのが絵本の力です。

ですから、これからも園でたくさんの種類の絵本の読み聞かせをしていただき、その時間を先生方も子どもたちと楽しんでいただいてほしいと思います。